

2018年9月30日発行
日本比較文化学会関東支部

2018年度第1号のレター発行となります。本号では、2018年9月16日（日）に大学コンソーシアムやまがた（ゆうキャンパス・ステーション）にて開催されました「東北・関東支部例会」での支部会員の発表要旨、並びに、2019年2月9日に予定をしております「関西・中部・関東支部例会」のご案内を掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

◆第49回 関東支部研究例会 ご報告◆

2018年9月16日（土）、大学コンソーシアムやまがた（ゆうキャンパス・ステーション）において東北・関東合同例会並びに第49回関東支部例会が開催されました。当日は7名の関東支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な例会となりました。以下、例会での関東支部会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶：東北支部長 伊藤 豊（山形大学）

◆研究発表：

1. 戦中期在北京日本人学校教師小川一郎の心情 —未刊歌集「大陸(たいりく)」の紹介と考察—

防衛大学校人間文化学科 准教授
木下哲生

日本人のコミュニケーション方略は、世間という場において「和」を保つことであり、そのためには「誠実」と「平等意識」が必要とされている。「誠実」とは、お互いが甘えあうことによる共倒れを防ぐためのものである。そして「平等意識」とは、「お互い様」という気持ちを生じさせる。言い換えれば自らの「分を守り」「分を尽くす」一生懸命さ、即ち「誠実」が第一義であり、それにより構成員全員に「平等意識」が生じ、最高道德である「和」が保たれることになる。これが日本の「世間」という場における内向きコミュニケーションの基本である。

一方、欧米人のコミュニケーション方略は、ハーバーマスの理論によると、コンセンサスの成立に必要なのは、真理性、正当性、誠実性の3つの妥当要求を提示することとされている。コンセンサスが得られなかった場合、「討議」に移行し、この「討議」にはだれでも参加できるのが理想だとされている。

欧米のコミュニケーション方略は、自分と対立する相手に自分の妥当要求を承認させる外向きコミュニケーションであること、そして「誠実」という要素は1/3でしかないこと、この2点が日本の方略と大きく異なる。

これを踏まえて『坊っちゃん』の冒頭の場面と「イナゴ事件」を扱った職員会議の場面における謝罪を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

日本人が「自らの責任を認めて謝罪すること」は「自発的服従」となる。その者をあえて攻撃することは、「絶対的立場」に立つことになり、それは「和」を最高道徳とする日本の世間ではあってはならない。つまり坊っちゃんの母や校長・教頭が取った自発的服従の態度は、対立を起こさせない最も効果的な方法であり、それゆえに日本人はすぐに謝罪するという習慣を持ち合わせている。しかし、その方略は日本の世間でしか通用しない。というのはハーバーマスの理論によれば、その「自発的服従」は誠実性のみに基づくものであり、真理性と妥当性という2つの妥当要求を欠く。しかも当事者である生徒抜きの職員会議は「討議」という場には当たらない。

漱石が『坊っちゃん』で描きたかったのは、こうした旧態依然とした日本のコミュニケーション方略は、欧米からは全く受け入れられないであろうという警告と嘆きである。

2. 露伴における近代中国知識人の影響 —「墨子」論の展開を通じて—

宇都宮大学大学院 博士課程
梁 鎮輝

従来の研究において露伴は、時に自然主義作家や尾崎紅葉の率いる硯友社と対照的な理想主義的作家のような単調な人物像として、時に東洋的古典の世界にどっぷり浸かっている「反近代」的な人物像として描かれてきた。しかし、そのどちらも甚だ不十分であるという認識が発表者の研究の出発点である。近代芸術家という狭隘な枠に収まらない露伴の思想世界を究明するために、一つは軽視されてきた大正・昭和期の多彩なジャンル及び題材の文章を再検討することであり、もう一つは今まで言及されてこなかった彼の創作を支えた近代中国知識人の存在を明らかにすることである。

本発表は、この二つの方向に沿って、露伴が受容したと思われる清末民初の知識人を体系的に概観した上で、1929（昭和4）年に岩波講座『世界思潮』の第二冊として刊行された『墨子』に注目したい。

露伴の『墨子』は、単なる東洋古典としての再生産だけでなく、近代中国における墨子思想の再評価の社会的気運を汲み取り、近代日本の課題に適応させたものであると考える。1904（明治37）年に、梁啓超は『新民叢報』に「子墨子学説」及び「墨子之倫理学」の連載をし、さらに1921（大正10）年に『墨子学案』を刊行した。また、梁が参考にした胡適・章炳麟らも様々な形で墨子評価を行っている。そして、もちろんこれらの近代中国知識人の受容した西洋の学問体系なども受容の射程内である。

「西洋」に近代化の道筋を模索する多くの近代文学者・知識人は前近代的な自我の部分と激しくせめぎ合う中、露伴は「露伴的方法」で前近代的な文人から近代的意味での知識人へ誰よりも軽やかに転身を図ったのではないかと、と東アジア思想交流の歴史・文学研究のクロスした学際的手法で露伴研究における新たな視座を呈示したい。

3. 藤井懶斎における『迪吉録』の受容

お茶の水女子大学大学院 博士課程
董 航

中国善書は元禄年間以前にすでに日本に伝来し、当時の文学・思想・道徳に影響を与え、近世社会の発展に大いに貢献していた。この過程において、中国の通俗文化の反映とされた中国明末の勸善思想家である顔茂猷（一五七八～一六三七）著『迪吉録』のような善書が近世日本で共鳴を呼び、知識人たちに歓迎・吸収・活用されるといった文化現象は大変注目に値するものである。

日本陽明学の祖と呼ばれる江戸初期の儒者中江藤樹（一六〇八～一六四八）が著した『鑑草』は『迪吉録』を素材として編訳した女訓書として知られている。浄土真宗大谷派の僧侶である浅井了意（生年

不詳～一六九一)の仮名草子作家としての処女作と言われる教訓書『堪忍記』が『迪吉録』を取り入れたことは従来の研究で明らかになっている。朱子学者の藤井懶斎(一六一七～一七〇九)著『大和為善録』から『迪吉録』に対する受容がうかがわれることも指摘されている。

しかし、茂猷の学問は儒教を基礎として、儒・仏・道という三教兼修のものであり、『迪吉録』は彼の善書思想及びその知識人としての立場を示した著書である。一方、懶斎の仏教批判の姿勢は彼の『本朝孝子伝』などの著書からうかがわれるものである。仏教を批判する立場から懶斎が三教兼修の勸善書『迪吉録』を取り入れたことをどのように受け止めたかについてはいまだに明らかにされていない。

本発表では、この課題を明らかにするための前段階として、『迪吉録』に見る顔茂猷の仏教融合と懶斎の仏教批判はそれぞれいかなるものなのかを明らかにすることを目的とする。

4. ゼロ葬と自然葬の葬送儀礼の比較について

宇都宮大学大学院 博士課程
今野 善伸

本発表は、去る3月関東支部第48回例会で発表した「ゼロ葬と自然葬の葬送儀礼の比較」に関する考察を死後の人格権の観点から考察を進めたものである。家族社会の変容に伴い葬送儀礼はますます簡素化・小規模化して、先祖代々の家墓制度も揺らいできている。一方で、その儀礼空間を演出し貨幣経済の中に取り込んできたのが葬祭業者である。しかし、このような葬送儀礼の商業化に対して背を向け、本来の自分たちの死を考えて自分たちの葬儀制度を実践する団体が現われた。その一つが『葬送の自由をすすめる会』である。すすめる会は、葬送の自由・自然に還る・自然保護の3つの理念をもって設立されたNPO法人であり埋葬形態の一つとして自然葬(=散骨)を推進している。

初代会長は散骨・自然葬を提唱し、これを「墓に入らない選択」とした。2代目会長も同じ「墓に入らない選択」の究極としてゼロ葬ⁱも葬送の自由のひとつではないかと提唱した。二代目会長は最近の独居世帯の増加や家族社会の変化を踏まえてゼロ葬を提案したが、組織内で波紋が大きくなり最終的に辞任に追い込まれた。本発表は、同じ墓に入らない選択ではあるが、自然葬を希望する人たちの死に対する観念と、究極のゼロ葬を望んでいる人たちの観念との違いを、『葬送の自由をすすめる会』のニューズレターに寄せられた会員の投稿を分析し検討する。

結論は、火葬された焼骨は、単なるゴミとして産業廃棄物扱いで処分されるのか、あるいは死後の人格権のある遺骨としてあつかわれなければならないという考え方の違いである。

現行法では死後の基本的人権を定めたものは存在しない。発表はすすめる会が唱える「死後の人格権」という観念はどのようなものか明らかにする。併せて日本の葬制の先行研究のなかで、「死者のアイデンティティ」がどのように語られてきたのかを検討し、「死後の人格権」の意味を考察する。

ⁱ ゼロ葬(0葬): 火葬場で遺骨を引き取らない究極の葬り方。多くの火葬場では焼骨を引き取ることが原則になっている。火葬場によっては申し出があれば遺骨を引き取らなくても構わないところが有る。西日本の火葬場は部分集骨で残り半分は火葬場で処分されている。

5. 筒井康隆の断筆宣言について

筑波大学大学院 博士課程
野田 晃生

筒井康隆は、高等学校教科書「国語I」に自らの作品「無人警察」が掲載されることに対して、日本てんかん協会から作品が差別的であるという抗議を受けたことをきっかけに、断筆宣言をした(1993年)。

この断筆宣言は、日本てんかん協会の抗議に屈した等のものではなく、メディア・出版社のあり方に対する筒井の抗議であった。

筒井は、1996年、断筆を解除しているが、その執筆再開のあり方には、どのような特徴が見られ、それは現在にまでどのように影響をしているのか、1993年の筒井の断筆宣言、1996年の断筆解除は、文学・メディア・社会の面から見て、どのような意義があるのか、について、本研究発表においては論じる。

6. SDGs Study Tour における高校生の意識変容

江戸川学園取手中・高等学校 専任教諭
小林 竜一

SDGs (Sustainable Development Goals) とは、貧困、飢饉、保健、教育をはじめとして、多岐にわたる分野を包摂した到達目標のことである。ただし、実現する可能性が低いという点で、さらにいえば、はなはだ皮肉な話ではあるが、たとえ実現したとしても、その暁にはたして地球が持ちこたえることができるのか頗る疑問であるという点で、所詮 21 世紀型のユートピア思想でしかないように思われる。それはさておき、昨今、グローバル化が抗い難き趨勢となつてすでに久しいものとなり、先進国である日本に居住する高校生や大学生に対して、SDGs の実現—21 世紀型の近代化—を牽引するグローバルリーダーとしての役割が期待されるようになっている。してみると、そうした人材を育成することは教育機関に対する社会的要請とあってよい。

発表者の勤務校（小中高一貫校）もその例外ではない。事実、勤務校においては、オーストラリアでのホームステイやアメリカでの名所見学をはじめとする海外研修プログラムが定着している。しかし、欧米文化圏に学ぶという思考そのものが 20 世紀的認識の枠組であり、高校生の活動記録（ポートフォリオ）の蓄積であるとか、PBL（課題解決型学習）といった生徒の主体性を育む側面が希薄であるという問題点を指摘せざるを得ない。

そこで、従来型のプログラムに対する反省に立脚し、21 世紀型の近代化の担い手となる有為な人材を育成することを目的として、発展途上国における現地研修を実施する運びとなった。このプログラムは、現地研修で完結した従来型プログラムとは異なり、事前学習、カンボジア・ベトナムでの現地研修、および事後学習によって成立しており、訪問先も小児病院、孤児院、義肢製造工場、医科系大学など、観光旅行者とは異なる視点で選択されている。

本発表では、参加生徒から提出されたプレ事前学習課題、事前学習報告書、および中間報告書に顕れた問題意識とその変容の諸相を分析することにより、世界型人材の育成に裨益するプログラムのありかたを再考したい。

7. 一対比較 WEB アンケートツールと画像解析ツールの開発の報告

京都経済短期大学 教授
森崎 巧一
湘北短期大学 准教授
高木 亜有子

これまで実践してきた印象評価分析法の精度向上を目指し、より客観的に印象の特徴を説明できる分析ツールの開発を進めている。今回の発表では、モバイル端末などを用いてアンケートデータの回収が容易に行える「印象評価ツール」の開発状況と、デザイン画像に含まれる色や形の情報を分析する「画

画像解析ツール」の開発状況について報告する。

印象評価ツールの開発では、スマートフォンなどのモバイル端末を用いてアンケート（一対比較）が容易に行える WEB アンケートツールを作成した。PHP を用いた動的な WEB サイトの特性を活かし、アンケートのランダム表示や残数表示などの機能をアンケートツールに実装した。

画像解析ツールの開発では、デザイン画像に含まれる色や形の成分を分析できるツールの開発が目標であるが、とりあえず既存の幾つかの画像解析方法 OpenCV を用いて試し、デザイン画像の特徴が分析可能かどうかを調査した。具体的には、シルエット近似、テンプレートマッチング、特徴点抽出、顔検出、Hough 変換による直線検出などを行った。

以上

◆閉会の挨拶： 関東支部支部長 近藤 俊明（東京未来大学）

*閉会后、懇親会を開催した。